巻頭言

ポスト湾岸線への始動

審議役　今　井　宏　典

昭和６０年度の技術研究発表会（第１８回）は、去る２月に盛大裡に終ったが、丁度３年前の５７年度の発表会には、冒頭の特別講演として、特に浅沼理事長にお願いして、「阪神高速道路公団の将来計画と関西新国際空港」と題して、京都方面への当公団高速道路の抱負、取組みについても語っていただき、熱心な質疑応答があったのを記憶されている諸兄も多いことと思う。

そして今年度には、すでに近畿地区幹線道路協議会において、特に市街地化の顕著な淀川右岸地域に、京阪間の域内交通に対応する新らたな都市高速道路を、また京都市内においても著しい渋滞区間に都市高速道路の構想を検討されるようになった。そしてこれらの調査の進捗、都市計画決定の見通し、地方公共団体の同意等の諸条件が整えば、京阪神公団への改組の方向に取組まれる方針が打ち出されており、最近では新聞の社説にもその必要性と緊急性が強調されていることは、諸兄の御存知のとおりである。

また一方では、淀川左岸線も具体的に計画の段階に持ちあがってきており、これも将来の第二環状線のスタートとして、上記京阪線と併わせて、湾岸線につづく当公団に課せられたビッグプロジェクトとして始動しているのが現在の状況である。

もとより、我々は、現在与えられている46.9㎞の湾岸線を中心とする延長116㎞の建設工事、そして130㎞に垂んとする供用路線の保全業務に全精力を傾注しなければならないことは、いうまでもないことである。そして、この遂行のためには、幾多の、我々が始めて経験するような各種の難かしい問題が、前途にたちはだかっていることは、諸兄もよく御承知のことであろう。

しかし、これからの１０年、２０年を慮るとき、上記のような新らしいルートの準備を、今から始めておいても、決して早過ぎるということはないであろう。技術屋の諸兄の多くが、その頃働き盛りの年齢で、過去の経験と蓄積のうえに活躍中のことだと想像する。

万博関連工事の完了した昭和４５年以降の、反公害運動という我々土木屋が始めて経験した社会問題が大きな原因であったにせよ、ポスト万博の１０年に近い期間の暗いそして苦渋に満ちた建設工事の停滞の辛酸を嘗めた我々は、ポスト湾岸線に再びそのような轍に陥らないよう、直ちにスムースに当公団の次なる課題に流れ込んでいけるよう、今から各分野で準備しておかなければならないと思う。湾岸線の全面的な着工は、その延長線として京阪線、第二環状線等の路線の、本格的な建設工事が待ち構えていることを、そして、それは大きな輝かしい希望であると同時に又我々技術屋に従来の取り組みでは不十分な、あるいは新らしい困難な種々の問題解決への努力を要求していることを十分覚悟しておかなければならないであろう。

新らしき始動に、ここまで漕ぎ着けた計画担当者に、今後もより一層の前進を期待し、組織の枠を越えた積極的な応援を心がけなければならない。

一方、現在計画部門に属してはいなくとも、自分達の携わっている技術分野で、あるいは自分達の得意とする分野において、これから最盛期を迎えようとする湾岸線を中心とする建設、管理の技術のなかにも、ポスト湾岸線への始動に取りかかっておかなければならない時期に、今や、到達しているのではないかと思うのである。